

アウグスティヌスの『独語録』における根本問題

岡 崎 文 明

(人文学部哲学教室)

Basic Problems in St. Augustine's *Soliloquia*

Fumiaki OKAZAKI

(Department of Philosophy, Faculty of Humanities)

目 次

I 序 論	(1)	§ 6 学問の真と真理 (veritas)	(11)
§ 1 『独語録 (<i>Soliloquia</i>) 』	(1)	IV 魂の探究	(12)
§ 2 『独語録』における根本問題	(2)	§ 1 なぜ魂の探究をするのか	(12)
II 神の探究	(3)	§ 2 魂と肉体の関係について	(12)
§ 1 神とは何か	(3)	§ 3 魂の不死性の証明 (I)	(13)
§ 2 神を知る知り方について	(4)	〔1〕 偽の成立する場について	(13)
§ 3 「神を見る (<i>visio Dei</i>) 」に至る条件	(5)	〔2〕 感覚を媒介とした魂の不死性の証明	(13)
〔1〕 魂の構造と機能	(5)	§ 4 魂の不死性の証明 (II)	(15)
〔2〕 魂が神を見るに至る順序	(6)	〔1〕 基体とそこに在る物との関係	(15)
§ 4 神を見るに相応しい自己になっているかどうかの吟味	(6)	〔2〕 真理を媒介とした魂の不死性の証明	(15)
〔3〕 魂の不死性の証明に対する諸問題	(6)	V 結 論	(17)
III 真理の探究	(7)	VI 文 献	(18)
§ 1 なぜ真理を求めるのか	(7)	VII 註	(18)
§ 2 真のもの (<i>verum</i>) とは何か (I)	(8)		
§ 3 真理の不滅性の証明	(8)		
§ 4 真のもの (<i>verum</i>) とは何か (II)	(9)		
§ 5 命題の真 (<i>verum</i>) と偽 (<i>falsum</i>)	(11)		

I 序 論

§ 1 『独語録 (*Soliloquia*) 』

本論文は、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, A. D. 354~430) が32才の時に著した『独語録 (*Soliloquia*) 』において提起された諸問題を、できるだけ明らかにしようと試みたものである。明らかにすると言っても、それら諸問題の全貌を彼の思想体系の中で、しかるべく位置づけをし、体系的に解明しようとしたものではない。むしろ後年、彼が発展させていった重要な問題の萌芽を『独語録』の中に見、それが生れて来た理由と発展させられていく方向を明らかにしようと試みたのである。なぜならこの『独語録』は、いわば「問題集」のごときのものであって、これらの諸問題は後年のアウグスティヌスに、そして更にアウグスティヌスを越えて後の中世の諸哲学者に提示され継承され、探究されているものなのだからである。

アウグスティヌスの32才はいわゆる回心 (*conversio*) の年 (386年) である。『独語録』は回心の直後に書かれた一群の著作 (カシキアム対話篇群) の最後に位置している。そしてこの著作の中には、それまでのアウグスティヌスの過去の体験全体が込められていると同時に後年の『告白 (*Confessiones*) 』や『三位一体論 (*De Trinitate*) 』等の大作へ連なるモチーフが明確に顕われている。過去の全体験が込められているのは、彼がそれまでに学び知って来た知識と回心を含めた一切の生々しい体験を総動員してこの『独語録』にぶつかったからである。この著述は独り神の御前で

なされた⁽¹⁾。

冒頭の祈りから察せられるように、真実に神に向かって助けを乞いつつ、総ての妥協を排し、一切を白紙に戻して真剣に自らの魂に対した。そして魂の隅々までも見窮めようと向った。その中から第一に提出されたのが「神と魂を知りたい」であった⁽²⁾。この「神と魂への問」はアウグスティヌスの一生を貫き通す問となった⁽³⁾。その問を追究しつつ彼の思想は形成されていったのである。それゆえ本書においてアウグスティヌスの思想の大きな枠組が萌芽していると言っても過言ではない。

『独語録 (Soliloquia)』はその題名が示すように「独りで語る (solus-loquor)」の意味である。自己の内で「理性 (ratio) と名付けられたもの」と「アウグスティヌス」の対話である。本来対話とはプラトンの対話篇に見られるように二者あるいはそれ以上の者が、ロゴス (lógos) の導きのままに或る主題をめぐる問いかけ答え合いながら探究してゆく形式である。しかし『独語録』ではアウグスティヌスの魂の内部で「理性」と呼ばれる者と「アウグスティヌス」と呼ばれる者が対話を行なうのである。従ってこの書は、祈りつつなされた一個人の「内面の討論」の記録であると言われている⁽⁴⁾。それゆえ対話相手の居ない「独白する (mono-loquor)」と同じではない。

ところで「アウグスティヌス」の対話相手である「理性」とは一体何者であろうか。アウグスティヌス自身も「理性」が突然語りかけて来た時に、これは一体外からなのか内からなのかと、この事を驚き怪しんでいる⁽⁴⁾。著述を追ってみると「理性」が「アウグスティヌス」に問いかけ導く形式で対話が進められている。また「理性」は焦せり逸る「アウグスティヌス」を宥めつつ、冷静に対話を進めようとしている⁽⁵⁾。すなわち「理性」は、直接的なまた現在の「アウグスティヌス」を導くもう一方の冷静かつ理性的反省的なアウグスティヌスであり、過去的一切を踏まえ、それらを客観化して眺め得るアウグスティヌスの目覚めた部分なのである。これだけなら特別に驚き怪しむ必要はない。我々が何かを考えている時の内面の対話の構造と類似しているからである。しかしながら、『独語録』の場合、この対話はそれだけに尽きない。「理性」はまた「アウグスティヌス」を導きつつ、自分も外から差し込まれた或る知性的な光によって導かれているのである⁽⁶⁾。そして対話を始める前に、或は対話がアポリアに陥った時に、祈りを求める⁽⁷⁾。そして外から差し込まれた光に照らされて「理性」は「アウグスティヌス」を新たな方向へ導いて行く。このように「理性」はアウグスティヌスの魂の一部でありながらも、アウグスティヌスの内に納まり切れない何かを持っている。内にありながらも、内を超え出た所から来る光を感知し、魂を内からその光の方に向ける働きをする「理性」とは一体何者であろうか。『独語録』の内部では、これ以上語られてはいない。しかし「理性」、光、魂の医師(後出)の三者は、後年、いわゆる「内なるキリスト」⁽⁸⁾の内に吸収されていくのではあるまいかと思われる。

本論文は以下『独語録』の根本問題とその由来を述べ、次いで、神、真理、魂について考察をなし、そしてそれらに随伴して生じてくる諸問題や難問を整理して、結論に至る。

§ 2 『独語録』における根本問題

『独語録』で展開された問題は幾つかある。しかもどれも大きく深い問題である。しかしこれらの問題は対話の過程で、思いつくままに無秩序に提起されたものではない。一つの根源的な問があり、それを目指して進んでゆく過程で、どうしても避けて通ることのできなかつた諸問題である。しかしながらアウグスティヌスは提起されたこれらの問題を、『独語録』においては、残念ながら意図した全体の一部しか扱うことができなかつた。そしてどの問題にも解決を見出すことなく終っている。しかしながら諸問題を提起し、打ち出した方向は誤ってはいなかつた。

では一つの根源的な問とは何であろうか。それは「常に同一にまし給う神よ。我を知らしめ給え、汝を知らしめ給え」である⁽⁹⁾。何故こう祈り求めざるを得なかつたのであろうか。まずそれか

ら見ていこう。

当時迄のアウグスティヌスの状態は「永い間、実に種々の事に思い悩んでおり、そして何日も熱心に私自身と私の善とを追い求めており、更にどんな悪が避けられるべきかを追い求めている私に……」⁽¹⁰⁾と端的に示されている。この三つのもの——私自身(魂)、私の善、避くべき悪——は個別々のものではない。悪といえば、当時迄のアウグスティヌスにとっては、直接的に情欲を指していた⁽¹¹⁾。彼は、いかにしても、悪を為す自己——悪に対して制御しきれない自己——を見出した。そしてこのような自己を知れば知る程ますます他方では至善を求めてゆく自己を見出す。この正反対の二方向に分裂し、そこから生ずる魂の苦悩と悲惨とを負っている自己、それが一つの自己である。どうして、一つの自己が、罪を犯かす自己と、善を求めてやまない自己に分裂したのであろうか。この善と悪への分裂の根源を探るために、この問を携えて自己の魂の中にはいり込んでゆく。従って悪と善の探究は同時に自己の魂の探究なのである。この意味で上記三者は一つなのである。

また彼は「意志の他一切を捨て、確実に永遠のもの」⁽¹²⁾を求める覚悟をしていた。この確実に永遠のものは流れゆく外的世界に求めるべきものではなく、自己の魂の内に求めるべきである。そしてこれは魂を経て神に至る探究であった。

しかしながら、この永遠で確実なもの(つまり神)の探究は何故なされるのであろうか。それは「祈り」にあるように⁽¹³⁾、端的に言えば自由になるためであった。あの分裂の悲惨からの解放を求めていたからである。そして、神の御許に至れば、罪に歪められた魂は正され、平和と安らぎの内に憩うことができる。この至福に至るために神は求められたのである。その原動力は神に対する強い愛であった。この愛によって神へ引き寄せられていったのである⁽¹⁴⁾。

『独語録』は次のように構成されている。まず初めに探究は「神」に向う。そこでは、神に至る道程の理論的な考察がなされ、その後その理論を自己に適用する。しかしそれは不可能であることを知り一切を神——直接的には「魂の医師」——に委ねる。次いで探究は「真理」に向けられる。しかしそこでなされた考察は完結を見ずに終る。最後に、前に明らかにされた真理を媒介にして「魂」の探究にはいる。ここで主としてなされたのは魂の不死性の証明である。これもまた不備に終る。

以下『独語録』に沿いつつ、そこにおいて提出された諸問題を明らかにしてゆこう。

II 神の探究

§1 神とは何か

本節全体は「神とは何か」について述べられる。しかし探究の始めにあたって神がもし全然知られていないとすれば、探究することさえ思いつかなかったであろう。探究に踏み出したからには、神は何ものかとして知られていなければならない。ところがもし神が完全に知られていたとしたら、これ以上探究をする必要はない。ただそこに安らうばかりである。従って探究に踏み出したからには、完全には知られていなかったに違いない。ではアウグスティヌスは、神を尋ね求めるからには、果してそれをどんなものとして知っていたのであろうか。端的に言えば、神を「自分が愛する(amare)もの」として知っていた⁽¹⁵⁾。その愛によって神は求められ知によって理解されねばならないと考えていた。そこからプラトニズムを背景にして神を太陽との比較において論じる。

太陽は「存在し」自ら「輝き」そして地上の一切を「照らす根源的な光」である。それと同様に、神もまた「存在し」「認識され」そして「神以外のすべてのものを認識され得るものにする」知性的な光であると言う⁽¹⁶⁾。詳言すれば、まず神は存在している。次に太陽が光の根源としてあらゆるも

のに勝って輝き渡っているように、神はすべてに勝って最高度に可知的な存在である。しかしながら最高度に可知的とは言え、「こうもり」の目には太陽がその過度の明かるさの故に可視的とならないように、罪に汚れた魂にも神はその過度の可知性のゆえに可知的とはならない。更に太陽が地上の一切を照らしそれらを見えるものとしているように、神は神以外のすべてのものを照らして可知的なものとしている。それは、諸学問が可知的であるのは何か学問的な太陽に照らされているからであるのと同じである⁽¹⁷⁾。この「照明」の思想は後年、いわゆる照明説として発展させられていく。

§ 2 神を知る知り方について

神を知る知り方 (*modus sciendi*)⁽¹⁸⁾ は徹底的に主体的である。それを一種の「否定の道」⁽¹⁹⁾ によって探究する。『独語録』においてはこの知り方は結局否定のままで終わっている。しかしこの否定を通して神を知る知り方が徐々に明かるみに出され、そのようにして知られる神が何であるかも少しずつ明らかにされていく。アウグスティヌスは諸々の認識様態を一つ一つ取り上げて吟味してゆく。

(Ⅰ) まず自然科学的認識を挙げる。これは「明日の月の形」の予測として提出されている⁽²⁰⁾。自然法則が知られている限り明日の月の満ち欠けを予測して「知る」ことは可能である。このような知り方を神を知る知り方としてよいであろうか。彼は言う、「否」と。なぜなら、このような認識はその前提として明日もこの自然法則を適用することができると言う確信があるからである。この確信は「信ずること (*credere*)」ではあっても「知ること (*scire*)」ではない⁽²¹⁾。更にこうして予測された事柄は、観測や実験によって検証されなければならない。検証する時には感覚が用いられる。このように自然科学的認識の方法は「信ずる」から始まり「感覚する」に終る。これは真に「知ること」ではない。なぜなら「知る」とは「信じる」や「感覚する」の介在や混入を、一切許さない純粋な知性の働きでなければならないからである⁽²²⁾。

(Ⅱ) では親友アリピウスを知っているように神を知れば満足か。「否」である⁽²³⁾。なぜなら彼はアリピウスを本当には知ってはいないからである。アリピウスを本当に「知る」とは彼の魂を「知性 (*intellectus*)」で知ることである。アウグスティヌスはアリピウスの魂を知性で知ってはいないと断言する⁽²⁴⁾。

一般に我々が誰か人を知っていると思っているのは大抵その人の外見や行為等によって推測される表面的なまた一時的な心理状態に過ぎない。それは感覚によって、或は感覚を通じて推測されて知られるものである。それはその人の魂を知性で知ることではない。その人の魂とはその人をしてその人たらしめているその人の根源、即ちその人の人格そのものである。それをアウグスティヌスは「理性的魂」⁽²⁵⁾と呼ぶ。この魂を純粋に理性で知ってこそ、知ったと言える。(この場合理性は感覚に対立させられた意味で使用されている)

では他人の魂を知るには一体どうすればよいのであろうか。それは自己の魂を知ることである⁽²⁶⁾。自己の魂を知っている深さにおいて他の人の魂を知ることができるからである。

では自己の魂を知るには一体どうすればよいのであろうか。一つは自己を自己の外に放ち、外の反応によって知ることである。これは経験と言われるものを作る。しかし経験のみで自己を知り尽くすことはできない。なぜなら経験の範囲は狭いからである。では外的経験の範囲を越えて、魂を知るには一体どうすればよいのであろうか。『独語録』ではこれ以上直接答えられていない。だが神を見る所にそれ以上知を要求することのない至福があるとすれば⁽²⁷⁾、そこでは当然友人の魂も知られていなければならない。ましてそこでは自己の魂が知られていないはずはない。つまり魂を知るには神を知らねばならない。しかし神は魂の外ではなくて内に求められねばならない。即ち自己の魂を通じて知られてゆく、ゆえに神を知ることと、自己の魂を知ることとは循環しお互いに補い合っている。

神に近づけば近づく程自己(魂)の罪の姿が顕わにされる⁽²⁸⁾。そして自己の眞の姿が知られば知られる程神はその姿を顕わにするのである。しかしこの問題は後年、たとえば『告白』等において明確にされていく。

(Ⅲ) 次にプラトンやプロティノスのような偉大な人が神について本当の事を語っていると、彼等が知っていた様に神を知れば本当に知ったことになるのであろうか。アウグスティヌスは「否」と答える⁽²⁹⁾。なぜなら神について眞実のことを語っている人が必ずしも神を本当に知っているとは限らないからである。というのは神を知るには宣べ伝えられなければならない。宣べ伝える媒介は言葉である。人は神について眞なる事柄が語られた時その言葉を眞に理解して始めて伝えられた神を知る。ところでその言葉を眞に理解せずしてもその言葉に信頼をおくならその言葉を語り得る。即ち或るものを眞に知っている人はそれを眞に語ることも可能である。しかし逆に眞のことを語ることができたとしても、語った当人は必ずしもそれを眞に知っていたとは限らない。理解せずとも聞かされた言葉をそっくり真似て語ることはできるからである。従って「語る」と「知る」とは別の事である。即ちそのことは、聞いた言葉を「信頼して語る」と「知性によって知る」との区別なのである。⁽³⁰⁾

凡そ語られた言葉を眞に理解するには語る人の理性的な魂を知っていなければならない。たとえプラトンやプロティノスが眞の事柄を語ったとしても、彼等のその魂を知らずして彼等の言葉を解することはできない。そして魂は知性によってのみ知られるのである。

(Ⅳ) では知性のみを用いる認識はあるのだろうか。ある。それは数学的認識である。ではこの認識方法を神のそれとしてもよいであろうか。

例えば幾何学の証明を行う場合を考えてみよう。まずしばらくは感覚の助けによって進まねばならないが、証明が始められるや知性が導き手となる。従って神も数学も、知性によってのみ知られるという点で一致している。だが両者の認識は全く同一とは言えない。次の点で大きく区別される。神を知ることによって、魂に神に対する愛(caritas)が更に増し加わるだけでなく喜び(gaudere)も生まれる。一方幾何学を知ることによってはそのような愛も喜びも生まれない⁽³¹⁾。この点で神の認識は数学の認識とは明確に区別される。

以上四つの知り方(modus sciendi)の考察により次の事柄が明らかになった。

1. 挙げられた四つの知り方は総て否定された。ゆえに神を知る知り方は我々の通常の知り方ではない。だが否定を通じて以下のことが明らかになった。
2. 神を知る知り方は「感覚する」や「信頼する」を混じえず全く純粋な「知性認識」である。
3. 神の知り方と魂の知り方は、幾何学を知る知り方と知性認識という点で共通している。そして神と魂の認識は相補的である。
4. 神を知ることによって、人は喜びと神への愛に溢れる。よって神の認識は客観的認識ではなく、主体的人格的な「我と汝」の関係にある認識である⁽³²⁾。
5. 以上を延長してゆけば、神の認識及び自己の魂の認識は神がする認識、即ち「絶対知」に至る⁽³³⁾。

§ 3 「神を見る(visio Dei)」に至る条件

[1] 魂の構造と機能

神を知るとは主体的認識であると述べた。それは知性による直観であっていわば神と類同化することによって神を一撃で洞察することである。そこから視覚との類比で上のように知ることを「見る」と言う。神を見るのは知性を含んだ魂である。ゆえに神を見る魂について考察されねばならない。

神を見る魂には三重の構造がある。これを感覚と比較しながら論じている。

魂には神を見る能力を持った「精神」がある。精神は魂のいわば「眼」である⁽³⁴⁾。この精神の中に認識対象に眼を向ける能力を持った「理性」がある。この理性は魂のいわば「眼差し」である⁽³⁵⁾。また精神には認識対象を知性的認識する「知性認識作用 (intellectus)」がある。それは魂のいわば「見る (visio)」に相当する⁽³⁶⁾。この三重の層において段階的に独自の働きがなされて「見る」は現実的に成立する。

その働きとは以下のとおりである。最初に知性認識能力を持った「精神がある」。第二番目に「認識対象に精神が向けられる」。その働きをなすのが理性である。そして最後に認識対象を「知性で認識する」。このようにして知性認識即ち「見る」という作用(働き)は段階的に現実化して完成する。それは丁度視覚において「見る」が成立するのは、視覚を持った「肉眼があって」、対象に「眼差しが向けられ」て「見る」が行なわれるのと同様である。

〔2〕 魂が神を見るに至る順序

さて以上のようにして成り立つ「見る」が神に向けられるためには、しかるべき順序、条件と資格を必要とする。(1)まず精神が神を見るに相応しい程に健康であること、(2)次に理性が正しく完全に神に向けられることである。これらのためには信仰、希望、愛が必要であると言う。

なぜなら (1) 精神が健全であるということは、肉体的な汚れから遠ざかっていることである。即ち可滅的な事物に対する欲望から自由にされた浄らかな精神でなければならない⁽³⁷⁾。汚れた精神が浄められるためには、まず健康になれば神を見ることができると言う「信仰 (fides)」と、健康になれるという「希望 (spes)」と、そして浄めに対する「愛 (caritas)」がなければならないからである。この信、望、愛の三条件下で、精神は神を見るにふさわしい健康を与えられる⁽³⁸⁾。

(2) 次に理性が神に正しく完全に向けられるには、やはり信、望、愛が必要である。それは神に正しく向けば神を見ることができ、幸福になれるということをして「信じ」、それが実現するのを「希望」し、神を見ることが「愛」さなければならないからである⁽³⁹⁾。かくして正しく完全に向けられた理性は「徳 (virtus)」と呼ばれる⁽⁴⁰⁾。

以上の二段階を経て最後の段階即ち神の知的直観にはいつて来る。神の知的直観とは「神を見る (visio Dei)」である。これはもうこれ以上神を見る必要のない仕方では知性が働いていることである⁽⁴¹⁾。ここでは知性の働きは窮まっている。人間にとって知性の働きが最高に善きものであるとするなら、この中に至福がある。この至福において愛 (caritas) は増し加わって来る⁽⁴²⁾。

魂が神の知的直観の内にあるとする。この時、魂がこの世にあって肉体と共に生きている場合と、肉体を脱した死後の至福の状態にある場合とでは相違がある。

前者において魂は肉体の内にあるので、肉体本来の働きである感覚からはのがれ得ない。そして感覚は常に知性を曇らせる。それゆえどれ程完全に神を見ていても、感覚の妨害に逆って魂をそこに保つのは困難である。従って魂を浄く保つことの正しさを「信じ」、将来肉体の重荷から解放されることを「希望」せざるを得ない。だからこの世の生においては「愛」の他に、「信仰」も「希望」も存在してはならない。

次に後者においては、魂は肉体を脱している。それゆえ肉体による妨害はない。ゆえに神を見続けているから、見神を信じることも、希望することも不要である。そこにはただ「愛」のみが残っている⁽⁴³⁾。

§ 4 神を見るにふさわしい自己になっているかどうかの吟味

以上は神を見るに至る順序の理論的な考察であった。アウグスティヌスはこれを自己に適用しようと試みる。そこでまず、自己の精神が健康か否かを自己吟味してゆく。

手始めに、金、名誉、妻、食物について順次吟味を進めて、そしてこれらはそれ自体に対する欲望からではなく、神に到達するために、もし必要なら忍耐して背負うべき重荷であると結論する⁽⁴⁴⁾。

次に友人の生命、自己の健康、自己の生命の三つに対する愛を挙げる。これらはただ「真の知識」を探し、獲得するためにのみ愛されるべきものである⁽⁴⁵⁾。この真の知識は神と魂のみを愛するアウグスティヌスにとっては、知識それ自体のために愛されるものである⁽⁴⁶⁾。なぜなら真の知識とは神と魂とに関する純粋な知識であるのだからである。しかもその知識は善でありそこに精神の光があるのだからである⁽⁴⁷⁾。

そして以上の吟味の結果からアウグスティヌスは肉体の欲望あるいは肉体に伴って魂にまでは入り込んで来る欲望の一切から逃がれ得たと断言する⁽⁴⁸⁾。ところが、眠られぬ夜にフト情欲にそそられた自己を「理性」の鋭い糺明によって暴露される。そして未だ浄められていない自己と自己糺明の限界とを知り自己の力で神の直観に至ることを放棄する。そして一切を魂の医師にゆだねる⁽⁴⁹⁾。

このように、最後に知ったのは未だ健康になっていない自己であった。この限界を持った自己の覚醒は悲惨の相を持つ。当時のアウグスティヌスにとって悲惨とはこの情欲であった。人間が持つ悲惨さは神に近づく程増々顕わにされていく。そして神と自己との間が増々開いてゆく。彼は人間に二種類あると言う。一方はすぐに神を直視できる程の淨い人間であり、他方は神の直観に耐え得ない病んだ人間である⁽⁵⁰⁾。ところで彼自身は後者に属していると思っている。しかしながら後年神に近づく過程の中で自己の悲惨を知るに伴い、人間は根源的に病んでいて誰一人として健康でないことを知るようになる。また逆に自己の悲惨を知れば知る程（仲保者を通して）神に近づき得ることを知るようになる。

この人間存在の本質的な有限性に対する自覚は神を知ることと自己の魂を知ることが補いあってなされると言えよう。

III 真理の探究

§ 1 何故真理を求めるのか

神と魂の知識は絶対知とも言うべきものであった（II, § 2）。なぜならそれは神と魂を「本当に」知ること、つまり「真理において」知ることなのだからである。従ってこの真理を窮めることによって「神と魂を知る」ことの真の意味が理解される⁽⁵¹⁾。即ち認識の確実性の根拠が明らかにされる。かくして真理の探究が始まる。しかしこれは単に認識の確実性の根拠の追究に留まらない。次章で展開される魂の探究における魂の不死証明に重要な意味を持っているからである。

「真理」は幅の広い概念である。アウグスティヌスは『独語録』において真理を一番身近なそして具体的な感覚的対象である「物の存在」から段階をおって真理なる神に至るまでのその全貌を明らかにしてゆこうとした。ここで提起された問は深い。しかしそのために十分な解決をみずに終わっている。論じられたのは真理論の極く基本的な一部分である。それは一見簡単に過ぎる観さえする。しかしそれだけに深い問が發せられていると言えよう。

まずここで訳語について次の事を明確にしておく。veritas を「真理」、verum を「真のもの」或は「真」と訳す。

アウグスティヌスが直接意図したことは「真のもの」とは何か。そして「真のもの」を成り立たせている「真理」は何処に在るかである。これを追って以下論じていく。

§ 2 「真のもの」とは何か(I)

「真のもの」について二様に定義されている。まず第一番目に「真のものは存在するものであ

る」とある。この存在する (est) は二つの意味——i) がある ii) である——を持っている。例えば「木が(で)あれば」それは必ず「真の木」でなくてはならない。もし偽の木ならそれは木ではないからである⁽⁵²⁾。従って凡そこの世界に「存在し」「～である」と述語付けられるものはすべて「真のもの」でなくてはならない。

さて「存在するもの」として定義された真のものは、あくまでも「存在するもの」に留まらず「真のもの」と言われるのは一体何故であろうか。それは「存在しているもの」を「真のもの」と判断する者 (intelligens) があるからである⁽⁵³⁾。この事は後に明らかになるように重要である。

第二番目にアウグスティヌスは「真のもの」を別の仕方でも次のように定義している。「純潔な人」が「純潔」によって成り立つのと同様に「真のもの」は「真理」によって成り立つ⁽⁵⁴⁾。これは「真理」の分有によって「真のもの」が成り立つという意味に解せられる。

さて、この二つの「真のもの」の定義は一体どのような連関を持っているのであろうか。そしてそれが言われている場は一体いかなるものであろうか。

前者においては「真のもの」は存在に即して考えられている。従ってこの「真のもの」が成り立つ場はこの世界即ち被造的な現象の世界である。そこから「真のもの」は可滅的となる⁽⁵⁵⁾。

他方後者では「真のもの」は不滅なる真理の分有によって成り立ち、従って不滅の真理が内在している (in est)。それゆえ「真のもの」は不滅である⁽⁵⁶⁾。このような「真のもの」はいかなる場で成り立っているのであろうか。この問題を明らかにしていくために「真理」を考察していこう。

§ 3 真理の不滅性の証明

以上の二様に定義された「真のもの」を巧みに使い分けて背理法によって真理の不滅性の証明を試みる⁽⁵⁷⁾。

(i) 「もし世界が減びるなら世界が減びたという事は真である」つまり「世界が減びた」が存在すれば「世界が減びた」は真である。この場合は「真のもの」の前者の定義を使用したところに、この命題の構造上のポイントがある。

(ii) 「ゆえに世界が減んでも真理は存在する」。なぜなら(i)で「真である」と言われており、真は真理によって成り立っているからである。これは「真のもの」の定義の後者を使用している。

次にこの推論の構造をそのままにして「世界」と「真理」を入れ換える。すると次のようになる。

(i) 「もし真理が減びるなら、真理が減びたということは真である」。

(ii) 「ゆえに真理が減んでも真理は存在する」。これは矛盾である。従って仮定(i)の「もし真理が減びるなら」が誤っている。

(iii) 「ゆえに真理は滅びない」。

さて上記証明について一つの問題が生じる。上で「真理が減ぶと仮定しても真理は滅びない」と結論された。この事は、真理が存在することと世界が存在することは同じ意味での「存在」ではないことを示している。同じ「存在」でないとするなら各々はいかなる意味で「存在する」のであろうか。『独語録』においては直接答えられてはいない。むしろアウグスティヌスは二つの「存在」を同じ意味に解している。しかし実際は、真理はイデア的な存在であるのに対して、世界は現象的な存在である。従って真理の存在の仕方はイデア的に永遠な仕方でも存在し、世界の存在の仕方は現象界の可滅的な仕方でも存在している。これらの存在が更にいかに異なるかは不明であるが、明らかに言えることは、イデア的な存在と現象界の存在とは、存在の意味が同一でないので置き換える時には十分な吟味がなされなければならないと言う事である。しかしアウグスティヌスは、『独語録』の時代においては、「真理」の存在と「世界」の存在を十分吟味することなく短絡していた、あるいは少なくとも二つの存在の区別はあいまいであったと言い得るであろう。

この事は更に、真理の不滅性の証明を試みたということからも推察される。なぜなら、もし真理が不滅のアイデアの世界にあるのならそれは不滅である。旧来の考え方からすればこのことには証明は不要である。しかしアウグスティヌスは証明の必要性を感じている。これは真理が不滅のアイデアの世界にあることを自覚的に捉え直そうとしていたのかも知れないことを示している。しかしそこには未熟さと、性急さがあつた。それゆえそこに「短絡」が生じたのであろう。それとも、真理の不滅性の証明を試みたこと自体は、可滅的な世界（現象界）と不滅的な世界（アイデアの世界）の捉え方に十分な反省が加えられる以前であり、未整理の時代にあつたことを示しているのだろうか。

以上から真理の不滅性の証明はそれ自体完全であると言い切れない何ものかがある。しかしアウグスティヌスはこの結論を一応完全であると認めている⁽⁵⁸⁾。従って我々も以下この立場に立って進んでゆこう。

さて前節と連関して更にもう一つの問題が生じて来る。「真のものは真理によって成り立つ」からすれば真のものは真理の住み家である。ところで真理は不滅であると証明された。従って真のものも不滅でなければならない⁽⁵⁹⁾。一方「真のものは存在するものである」からは真のものは可滅であつた⁽⁵⁵⁾。この二つの結果は矛盾である。どうしてであろうか。問題は真理によって成り立つ真のものが在る場であることを指摘しておいた⁽⁶⁰⁾。その場はこの世界か、アイデアの世界か或いはそれらとは別の何らかの場なのか、『独語録』では十分に明らかにされていない。だが私見を加えるなら、アウグスティヌスが「真理によって真のものが成り立つ」と言ったのは $1 + 2 = 3$ の命題は真であるといった、言わば具体的な「存在」から離れた抽象的な対象（数学的な或は学問的な対象）である（後出）ことを考えあわせてみるならこの「真のもの」はこの世界ではなくてアイデアの世界において成り立っていると思われる。

では何故アウグスティヌスにはこの矛盾或はアイデアの世界とこの世界との区別のあいまいさがあるのだろうか。ここで彼の置かれていた歴史的な立場が考えられなければならない。当時知識人の常識としてその思想の背景にあつたのは広い意味でのプラトニズムである。これは今日の世界において我々が自覚するとしないとかかわらず、科学技術を背景に考えざるを得ないのに似ていると思われる。この古い伝統的な立場でキリスト教によってもたらされた新しい自己を自覚的に解釈しようとしながらも、解釈しきれない焦りと葛藤の中にあつたのが『独語録』の時代であろう。この焦りと葛藤の中から短絡や矛盾更には区別のあいまいさが生じて来たのではなからうか。

§ 4 「真のもの」とは何か（Ⅱ）

§ 2で「真のもの」は二様に定義されたのを見た⁽⁶¹⁾。本節ではその一方の「存在」に即した個物としての「真のもの」について考察してゆく。「真のもの」は「見る者」の判断の下に「存在しているもの」であつた。即ち「真のもの」を成り立たせている要素は二つある。第一に「見る者」である。第二に「存在」である。この二要素の内存在に視点を置くなら(1)「『真のもの』は存在するものである」となる。しかしこの定義に対しては反論が出される。もしそうなら真のものの否定である「偽」⁽⁶²⁾は存在しないことになる。これは現実に反すると⁽⁶³⁾。これを回避するために、「見る者」に視点を移して(2)「『真のもの』は認識能力のある者が認識しようと思う時に認識者の眼に見えるがままにあるものである」と言いかえる。しかしこれに対しても反論が出される。もしそうなら絶対に見ることの出来ないもの、例えば地中深く埋もれている石や丸木の中心部などは真のものにはならないことになる。またこの石が或る者には石に、別の者には木片に見えるなら、その一つの石は真のものであると同時に偽のものとなる。同一のものが真のものであり、同時に偽のものであるということはあり得ない⁽⁶⁴⁾。

このようにして定義(1)から出発した探究は定義(2)に移ったが、ここにも落ちつくことは出来ず、

困難を含んだまま(1)と(2)の間をさまよう⁽⁶⁵⁾。この困難(アポリア)から抜け出すために真のものの否定から成り立つ偽の考察を始める。真のものの定義(2)から偽を「見られるがままには存在しないもの」⁽⁶⁶⁾として導出する。これは具体的にはいかなる意味で言われるのであろうか。それは(イ)「偽とは真のものに類似したものである」⁽⁶⁷⁾という意味である。即ち偽の原因は「類似」⁽⁶⁸⁾であると言う意味である。しかしながら二つの捺印、卵のようにいづれが真でいづれが偽とも区別のつかない程よく似ているものはどうであろうか。一方が他方に類似しているからと言って偽とは言えないのではないか、従ってむしろ(ロ)「偽とは真のものに似ていないもの」と言わなければならない⁽⁶⁹⁾。しかしながらあらゆるものは何らかの点でお互いに不類似性を持つ。従って「あらゆるものは偽である」となる。これは事実と相容れない。では(イ)と(ロ)の折衷案として(イ)「偽とは真のものに類似した点と類似しない点を兼ね備えている」としても、(ロ)の立場と同じく全ゆるものが偽となる。ここにおいて「偽」の探究も「真のもの」の探究と同じように、一つの立場に安住できず極端な二つの立場の間を揺れる⁽⁷⁰⁾。従って「真のもの」の探究も依然としてアポリアに留まらざるを得ない⁽⁷¹⁾。

さて、ここで探究の始めを顧みると、真のものの定義(2)から出発して偽を分析して来た。このアポリアの原因は(2)から由来している。ここで定義(1)に眼を転じよう。すると真のものの否定として偽は「非存在」として見ることができる。そこから(ニ)「偽とは実際には存在していないものが存在していることを装っているものであるか、或は存在しようとしながらも実際には存在していないものである」⁽⁷²⁾と言える。もう少し見方を変えてみよう。定義(1)より「存在するもの」と「真のもの」とは同一であった。従って(ニ)において「存在するもの」の代わりに「真のもの」を入れてみる。すると「偽とは実際には真のものではないものが真のものであることを装っているものである。或は真のものであろうとしながらも実際には真のものではないものである」となる。この定義の前半は偽の真のものへの類似性を表わし、後半は偽の真のものへの不類似性を表わしている。⁽⁷³⁾

以上から「偽とは存在を目指しつつも存在し切れないものである」ことが判明した。しかし偽が非存在と言っても全くの非存在即ち無ではない⁽⁷⁴⁾。なぜなら全く存在しないものは真のものに似さえしない。従って偽は無(nihil)ではない。つまり偽とは「存在」と「無」の中間に属し、存在を目指しているものである。言い換えれば偽は存在への類似である。この思想は後に、スコラ哲学の時代において「存在のアナログア(analogia secundum esse)」⁽⁷⁵⁾として発展させられていく。

このようにして「真のもの」を求めてなされた偽の探究は(イ)(ロ)のアポリアから抜け出して(ニ)において一応矛盾なく遂行された。ここから必然的に「真のもの」の定義は先の定義(1)において矛盾なく落ち着くかのように思われる。しかしアウグスティヌスはこれを明らかなものとして満足の意を表わして受け入れているとは思われない。なぜなら偽は(ニ)で完全に定義し尽されたわけではなくて(イ)(ロ)の側面を持っており、また「真のもの」は(2)の側面も持っていないからである。換言すれば「真のもの」は単に「存在」にかかわるだけでなく「見る者」ともかかわらなくてはならなかった。しかし(1)は見る者とのかかわりを明らかにしてはしていない。それを明らかにしているのは(2)である。しかし(2)には動かし難いアポリアがあったからである⁽⁶⁴⁾。かくしてアウグスティヌスは(1)と(2)の間を調停できず「真のもの」の探究にサジを投げ出したのである。

このアポリアは「見る者」を有限と考えたところに原因を持つ。「真なるものは総て存在するものである」が成立するために「総ての存在するものを在るがままに見ている者」がなければならない。その者こそ冒頭でそれに向かって祈った真理なる神である⁽⁷⁶⁾。この神を背後にして「真のものは存在するもの」であり同時に「見られるがままにあるもの」なのである。なぜなら神の知性は総てのものを見ると同時に見ることによって総てのものを存在させているからである。この観点から見ると、一見挫折とも見える探究の過程に「真のもの」と「存在」の関係の核心を明かすみに出し、こ

の問題の解決の方向を打ち出したところにアウグスティヌスの独創性が見られると思われる⁽⁷⁷⁾。

§ 5 命題の真と偽

前節までは具体的個物が「真のもの」と言われる根源を考察して来た。その根源は「見る者」と「存在」であった。ところで本節では抽象的な存在である命題の「真 (verum)」と「偽 (falsum)」を考察の対象とする。

「我軀につばき逞しき飛龍をつけぬ」⁽⁷⁸⁾の命題を考察しよう。これは「真」「偽」いずれであろうか。飛龍は実在しない。しかし仮に飛龍が存在していてこの命題に語られている事が現実のものであったとしよう。するとこの命題は「真」となる。つまりこの命題に対する事実が存在した時にこれは真となる。

しかし実際にはこのような事実は在り得ない。ゆえにこの命題は事実と対応しないので「偽」となる。

命題の偽の原因は二種類ある。第一は人がこの命題の内容に信用をおかない場合であって「表現形式」のみが真の命題を真似ている場合である。この場合、命題は偽であるが欺きではない。上の命題はこれに相当する。第二は人がこの命題の内容を現実のものとして信用している場合で表現形式は勿論「内容」までも真の命題を真似ている場合である。この場合、命題は偽であると共に欺いている⁽⁷⁹⁾。従って命題の真偽は内容に対応する事実の有無によって決定される。

次に「鉛は偽の銀である」という命題を考察してみよう。この命題は真である。なぜなら鉛は実際に銀に類似しているからである。ところが鉛や銀という個物に即して見るならば、両者はいずれも「真のもの」である。しかし鉛は銀を真似ているので偽の銀と言える⁽⁸⁰⁾。

従って偽を類似という点で眺めると、命題全体が事実を真似る場合と個物が他の個物を真似る場合とがある⁽⁸¹⁾。

ゆえに個物も命題も存在との対応において真や偽が決せられる。

§ 6 学問における真と真理

個物としての真のものは上記の鉛のように一方では真でありながら他方では偽であった。アウグスティヌスはそのような真ではなくて、どの点から見ても真であるものを目指していた。それを彼は学問の中に見た。

彼は学問の一つとして文法学を取り上げて考察する。これは創作に関する真を教え真を認識さす学問である⁽⁸²⁾。そして定義・類・部門・区分等の諸原理に従って体系的に組織立てられている。これらはいやしくも学問である限り学問に備わっていなければならない学問の学問たる所以である。この学問性は討論の規則 (regulae disputandi) ——弁論法——に仰ぐのでなくてはならない⁽⁸³⁾。ゆえに討論の規則——弁論法——は諸学問を真たらしめ学問たらしめている学問の学問である。しかしこれはこれ自体で真の学問であるのではない。これはその学問たる所以即ちその学問性を更に上のものに仰ぐのでなくてはならない。これが「真理」である。真理は討論の規則——弁論法——を含めた一切の学問を学問としているので、自らも学問であると同時に一切の学を真の学としている⁽⁸⁴⁾。そのために真理と言われる。この真理は更に上に仰いで真理であるのではなくて、その自体究極的な真理なのである。そしてこれは「自らによって」「自らを通して」「自らにおいて」学問でありかつ真理であるのである⁽⁸⁵⁾。

以上から学問の真は「真なるものは真理によって成り立つ」⁽⁸⁴⁾という意味における真であることが判明する。ゆえに真の学問の内に真理が宿り、真理が宿っているゆえに真の学問は不滅である。そしてこの学問が人間の魂に宿っている。ここから次章において魂の不死性の証明が試みられる。

学問は真である限り真理を宿す。しかし同時に「存在」と何らかの関係にあるのではなくてはならない。果して学問の真は存在に即して見るとどうなるのか、それは『独語録』において明らかにされてはいない。

IV 魂の探究

§ 1 何故魂の探究をするのか

『独語録』における魂の探究は魂の不死証明で尽きてしまった。これは当時のアウグスティヌスにとって魂に関する探究の最も基本的な関心事であった。これを土台にして魂の全貌を明らかにしようとしていたと思われる。では魂の不死証明は何故試みられたのであろうか。

アウグスティヌスは幸福を求めていた。その幸福は「神と魂を真に知る」ことにあった。それらは純粹に知性によって知られるものであった⁽⁸⁷⁾。

現在自分（アウグスティヌス）は神と魂に関する真の知識を求めている。現在「生きている」のは「知る」為である⁽⁸⁷⁾。そして「生きている」ことは「存在している」ことである⁽⁸⁸⁾。そして「生きる (vivere)」ために「存在し (esse)」, 「知解する (intelligere)」ために「生きて (vivere)」いる。そしてこれら三つ——「存在し」「生きる」「知解する」——のことを確実に「知っている」⁽⁸⁹⁾。従って現在は幸福に向っている。

将来とも魂は「存在し」「生き」そして幸福に至るために神と魂の知識を「知りつづける」であろうか⁽⁹⁰⁾。いや知り続けなければならない。キリスト教の信仰が教えるところに従えば、魂は肉体の死後も「存在し」「生き」そして「知り」つづける。そしてそのことは知性によって何らかの程度捉えられるに違いない。なぜなら知性認識と信仰はお互いに支えあって深まっていくものであるからである。このようにアウグスティヌスは、信仰は知性によって理解され得、知性的理解は信仰によって深められ得るということを確認していた。この知性に対する自信と信頼から魂の不死証明に立ち向かったのであろうと思われる。

魂の不死性の証明は二段構えになっている。最初に永遠に「生きる」ことを証明する。それによって必然的に永遠に「存在する」ことが証明される。その次に永遠に「知性認識」し続けることが証明されなければならない⁽⁹¹⁾。『独語録』ではこの内の前半部つまり永遠に生きることの証明の試みのみで終わっている。しかもその証明は完全とは言いがたい。しかし我々は上記の彼の意図を汲みつつ見ていこう。

§ 2 魂と肉体の関係について

魂を感覚（視覚）と区別して感覚（視覚）と並行させて既に論じた⁽⁹²⁾。しかし魂は肉体に在る限り感覚と完全に切り離すことはできない。なぜなら感覚は肉体固有の働きとして肉体を通じて魂に働きかけるからである。従って人間の魂はこの世に在る限り、感覚と不可分に結びついて感覚を魂の一部として含んでいると考えなくてはならない⁽⁹³⁾。

魂における感覚の働きは肉体を通じて外界の情報を受け取り魂の内にそれを再現し表象する。そして表象されたものを知性が認識する。

魂の内にある感覚は肉体と直接的な関係を持っているために魂の内でも最下位に属している。それに反し理性的な魂はそれによって動物の魂と区別される根拠である⁽⁹⁴⁾ゆえに、魂の中で最上位を占めているとされる魂の理性的な部分は animus（精神）と呼ばれている。

では肉体の死後魂が生き残るとすればどうであろうか。感覚は肉体と共に滅びる。とすれば魂は精神的或は理性的な部分のみとなる。ゆえにこの世における魂は単純なものではなくて可死的部分を含む複合体と考えられる。

それにもかかわらずアウグスティヌスは魂と肉体を全く切り離して考えていたように思われる。少なくとも魂と肉体はお互いに相容れないものとして考えられていたようである。そう考えた背後

には「魂は不滅でなくてはならない」という要請があったと思われる。この要請下に、肉体は滅びる。そしてもし肉体の形相が魂であると考えたら不滅であるべき魂が可滅的な肉体と、「形相」と「質料」という関係で、本質的に結合することになる。これは不合理である。なぜなら「木」と「木の姿」を考えると木が滅べば木の姿も滅びる。それはこの二者が不可分であるからである。丁度このようにもし魂と肉体が結合しているなら肉体の滅亡と共に魂も滅亡することになるからである。

では魂が肉体の形相でなければ肉体はいかなる形相を持つのであろうか。その形相は不滅の真の形相ではない。むしろ真理の似姿を宿した偽の形相と言わねばならない。なぜなら真理そのものを宿している形相は不滅の真の形相となるからである。一方肉体は可滅的であるので、その形相も可滅的であり従って偽の形相と言わざるを得ないからである⁽⁹⁵⁾。

§ 3 魂の不死性⁽⁹⁶⁾の証明(1)

[1] 偽の成立する場について

先記したように、「偽は実際に在るのとは違ったように見えるもの」である⁽⁹⁷⁾。そして偽が成立するためには「見る者」の介入を要した。ここでは「見る者」とは「感覚」である。

この感覚が魂の内に偽を表象し、表象された偽に知性が同意する時に欺きや誤謬が生じる⁽⁹⁸⁾。以上から偽は魂、特に感覚の内に存在を持つと言えよう⁽⁹⁹⁾。

[2] 感覚を媒介とした魂の不死性の証明

上記結論を前提として魂の不死性の証明が試みられる。

(i) 偽は感覚の内にある。 (ii) 偽は常に存在している。 (iii) 従って感覚は常に存在する。
(iv) 感覚は魂の内にある。 (v) 従って魂は永遠に存在する。 (vi) 魂は生きていなければ感覚しない。 (vii) 従って魂は常に生きる⁽¹⁰⁰⁾。

さてこの証明を吟味してみよう。前提(i)は「偽は実在の世界に存在するのではなくて見る者(つまり感覚)の内に存在する」という意味である。従って「見る者」と切り離しては偽は存在し得ない⁽¹⁰¹⁾。それにもかかわらず前提(ii)で切り離して「偽は常に存在する」と措定している。そこから(iii)を帰結させるのは一種の循環論法と言わねばならない。ここにこの証明の最大の難点があると思われる。

更にこの証明で扱われた「魂」はアウグスティヌスが不死を期待する魂と完全には一致したものではなかった。彼が念頭に置いていた魂は「個的な魂」である。ところがこの論証中で扱われた魂は人間のみならず動物の類に属するものも総てが持っている「感覚的な魂」である。ゆえにこの魂には人間の本質的な働きとしての知性認識作用がはいっていない。このような魂はアウグスティヌスが本来意図したものと全く懸け離れていると言わざるを得ない。しかし彼の心積りでは最初から完全な個的靈魂の不死性を扱うことではなかった。むしろ最も卑近な、それゆえ動かすことの出来ない現実性を持った魂から出発して、順次段階を追って自分が念頭に置いていた魂に近づいて行こうとしていたのではないか。ゆえにまず魂が「存在し」「生きる」ことを証明した後に、魂の「知性認識」を扱う心積りをしていたと思われる⁽¹⁰²⁾。

ところでアウグスティヌスは証明の中のこの最大の難点(つまり循環論であること)に気付いていなかった。その代わり彼は前提(i)(ii)から(iii)が帰結するとしてもそれは同一の感覚が永遠に存在するというよりもむしろ多数の感覚が生成消滅しつつ常にこの世界に絶えることなく存在するからではないかとの疑問を提出している⁽¹⁰³⁾。

そこでこの疑問を除くために証明過程に「偽」の代わりに「感覚界(*rerum natura*)⁽¹⁰⁴⁾」を置く試みをする。感覚界とは実際に在るがままの世界(これを実在界と言おう)を感覚によって捉え

る世界である。この感覚界の中に在るものが実際に在るがままの世界（実在界）の中に在るものと同一に見えるならばそれは「真のもの」となり逆に違ったように見えるならば「偽」となる。ゆえに感覚界には「偽」のみならず「真のもの」も存在する。従って感覚界は「感覚」なしには存在しないものであるから、偽の代わりに感覚界を使っても、証明過程からあの循環による難点を除くことはできない⁽¹⁰⁵⁾。更にアウグスティヌスが提起した疑問も解決されない⁽¹⁰⁶⁾。

そこで更に改善を試みる。彼は「感覚界」の代わりに「物体」を置こうとする。なぜなら物体は感覚界と違って見る者が居なくても存在しているので、偽や感覚界と違って、その絶対的な措定が可能となるからである。

そこでまず物体の在り方を調べよう⁽¹⁰⁷⁾。(i) 見られる通りに存在していなければどんな物も真のものではない。(ii) 一切の物体も感覚によらずしては見られない。(iii) 感覚は魂なしには存在しない。(iv) 真の物体でなければ物体ではない。(v) ゆえに魂なしには物体はない。

彼はこの結論(v)を使って魂が不死であることを証明する積りであったと思われる。しかし実際にはそれをやらずに終っている。だがここでその意図を汲んで魂の不死性の証明を展開してみよう。

(vi) 物体は魂なしには存在しない。(vii) 物体は常に存在している。(viii) よって魂は常に存在している。(ix) 魂は生きていなければ物体を見ることはできない。(x) よって魂は常に生きる。

この証明によっても先記疑問⁽¹⁰⁸⁾は除かれぬ。アウグスティヌスはこれに気付いていたので教えてこう展開をしなかったのであろうか。しかしこう展開することによって一つの問題が提起される。第一番目の魂の不死証明のポイントは「偽」を使った所にある。この偽は魂の内には存在を持つが現実の世界（実在界）には存在を持たないものであった。しかしそれにもかかわらず偽は実在界の存在として絶対的に措定された。そこからあの循環による難点が生じた。二番目に「感覚界」を導入しようとした。この感覚界には偽も真のものも含まれる。しかし感覚界も感覚なしには存在し得ない。なぜなら感覚によってとらえる世界であるからである。よって同じ難点が生じる。三番目に「物体」を導入した。これは前二者と違って見る者が居なくても存在する物である。ゆえに物体は絶対的に措定し得る。しかし「真の」物体として存在するためには見る者が存在していなくてはならない。換言すれば見る者である魂が物体にかかわる時にそれは「真の」物体として浮び上がって来る。従って結論(v)は「魂なしには真の物体は存在しない」と修正されねばならない。ここで「真の物体」と「物体」とは論理的には全く同一ではない事が明らかとなった。

ゆえに証明(vi)～(x)において前提(vi)はこう書き換えられねばならない。(vi)'「真の物体は魂なしには存在する事はできない」と。すると(vii)も(vii)'「真の物体は常に存在する」と書き換えられなければならない。こうなると(vii)は絶対的に措定する事ができなくなる。するとこれは第一・第二の証明と同じ難点を生む⁽¹⁰⁹⁾。

以上から明らかになった事柄をまとめよう。

1. 偽・感覚界・物体を使った三つの証明の構造は同じである。それはいづれも「見る者」と切り離し得ないという点である。そして困難に陥るとすればそれら二者を切り離す所である。
2. このようにして扱われた魂は動物一般の魂ではあっても理性的な個人の魂ではない。
3. アウグスティヌスの疑問⁽¹¹⁰⁾は解決されない。

次に以上から生じる二つの問題を考察し、後に若干の私見を加えよう。

I. 三番目の証明において物体を媒介とする場合に生じる問題である。それは「(vi)' 魂なしに真の物体は存在しない」と「(vii) 物体は常に存在する」は両立しないと思われるという問題である。なぜなら(vi)'の成り立つ場は見る者の居る場である。言い換れば認識とかかわる場であってそれは認識者の魂の内にある。それを認識界と一応呼ぶことにしよう。(vii)の成立する場は見る者が居なくてもよい場であってそれを存在界と一応呼ぶことにしよう。ところでその両界においては(vi)', (vii)の内一方が成り立てば他方は成り立たない。即ち認識界では(vi)'は成り立つが

(vii) は成り立たず、存在界では (vii) は成り立つが (vi)' は成り立たないことになる。だが (vii) を認識界に移すことはできるがその時には「物体」を「真の物体」としなければならない。このように置き換えられた命題は (vii)' 「真の物体は常に存在する」となる。こうすれば (vi)' と (vii)' は同じ次元で論理的にかみ合う。一方 (vi)' は存在界に移されれば (vi) 「魂なしに物体は存在しない」となり (vi) と (vii) とは同じ存在界で（これらが論理的に成立するか否かは別にして）論理がかみ合う。それゆえ三番目の証明では成立する場が本質的に異なる二つの命題が結び合わされていることになる。ここに本質的な難点がある。ところで人間は果して存在界のみで議論ができるだろうか。例えば「物体は常に存在している」などと絶対的に或る命題を措定することができるだろうか。なぜなら存在界そのものを認識することは人間にはできないからである。むしろ人間は存在界を源とした情報を受け取り存在界の写像である認識界しか認識することができないのではないか。

Ⅱ。「偽」「感覚界」「真の物体」いずれも感覚の対象である。感覚は魂の内でも可死的部分である。ゆえに例え感覚を使って魂の不死が論証されたとしてもそれが成り立つのは肉体をまとっている間（つまりこの世に生きている間）であるという困難に陥る。従ってこの不死証明はもう一つの本質的な難点を持っていると言えよう。

しかしながら感覚に着目したのはアウグスティヌスの単なる思いつきではない。古代ギリシア思想においては普遍靈魂の不死性は証明されてきた。だが彼が問題としたのはそのような魂ではない。個別的な魂である。そしてその探究は彼以前には殆どなされていなかった。この言わば前人未踏の領域に踏み込もうとしたのが『独語録』の魂の不死証明である。

肉体の死後魂は肉体から離れる。この分離靈魂は完全な人間ではない。それは復活の時にあらためて肉をとり個別化されて完全な人間となる。トマスは個体化の根源を質料におく（たとえば、*De ente et essentia*, c.2, n. 6）のであるが、アウグスティヌスにあっても肉体（質料）に結合して個別化した感覚にまず着目したことは注目に価する。このことは証明の成否は別として、着眼点は当を得ていたと言いうるであろう。

§ 4 魂の不死性の証明（Ⅱ）

〔1〕 基体とその中に在るものとの関係

或るものが他のものの中に在る在り方に二通りある。

Ⅰ. 基体とその中に在るものが分離可能な仕方で在る場合。例えば東の空と太陽、又この場所とそこに在る木などで、これらのうちの一方（例えば太陽）を他方（例えば東の空）から引き離すことができる。太陽は運行し、木は移植され得るからである。

Ⅱ. 基体とその中に在るものが分離不可能な場合。例えば太陽と光、火と熱、雪と冷たさなどで、これらのうちの一方を他方から引き離すことはできない。一方（例えば太陽）が減れば他方例えば光も滅ぶ。一方が生じれば他方も生じるといった関係にあるからである。そしてアウグスティヌスは学問（知識）と魂の関係は後者の場合であるとさり気なく言っている⁽¹¹¹⁾。これを前提に新たに魂の不死性の証明を試みるのである。

〔2〕 真理を媒介とした魂の不死性の証明

先の不死性の証明は「感覚」を媒介とした所に独自性と同時に本質的な難点があった。そこで最後に伝統的なプラトニズムに立って魂の不死証明にとりかかる⁽¹¹²⁾。

(i) 基体とその中に在るものが互いに分離され得ない仕方で在る場合基体内に在るものが永遠であるなら基体そのものも永遠である（〔1〕のⅡの場合）(ii) 一切の学問は魂を基体としてその中に在る。(iii) 学問と魂は互いに分離され得ない関係にある⁽¹¹¹⁾。(iv) 従ってもし学問が永遠であるなら魂も必然的に永遠でなくてはならない。(v) しかるに学問は真理である。(vi) 真理は永遠である。(vii) 従って魂は永遠であり不死である。

この証明に対してアウグスティヌスは次の疑問を提出している。

I. 迂余曲折したにしては余りにも簡単に証明されたではないか。

II. この証明に従うと学問の真理に精通している者は別として、通じていない者、例えば幼児の魂は不死ということにはならないのではないか。

III. 真理は魂の内に永遠には存在しないのではないか。

IV. 真理は滅びる（真理の不滅性の証明が既になされているのに！⁽⁵⁷⁾）かそれとも学問（disciplina）——その代表として弁論法（disciplina disputandi）——は真理ではないのではないか⁽¹¹³⁾。

疑問Iに対してはこう答えている。前人未踏の地を切り拓いて来たのだから迂余曲折は仕方なかったと⁽¹¹⁴⁾。

次に、諸疑問中II、IIIはさておきIVに答えようとしている。そこで真理の不滅性の証明を再度繰返して確認し⁽¹¹⁵⁾、学問の例として幾何学を取り挙げて考察した後こう結論する。幾何学の図形には真理が宿っているか或は真理の中に図形が宿っているかである⁽¹¹⁶⁾。いづれにしても幾何学は真理である。従って学問は真理である。このようにして疑問IVは答えられている。しかしこれで疑問IVに対して十分答えられているか否かは問題であるが、それは別にして、疑問II、IIIに対しては答えられないままに上の証明の論理構造はそのままにして「学問」の代わりに「幾何学」を入れて証明を精密化している⁽¹¹⁷⁾。

(i) 幾何学の図形が真理の内に含まれているか、真理が幾何学の内に含まれているかである。

(ii) いづれにしても魂、即ち理性（intelligentia）の内に図形は含まれる。(iii) 従って真理も魂の内に含まれる。(iv) 一切の学問は、基体の中に分離され得ない仕方であるものように、魂の中に存在している。(v) 真理は不滅である。(vi) ゆえに魂は不死である。

この証明によっても疑問II、IIIは残されたままである。しかし疑問II⁽¹¹⁸⁾に対する直接の答はなされていないが、『独語録』の最終章の魂の想起説が間接的な答えとなっていると思われる。⁽¹¹⁹⁾しかしIIIはそのまま残される。

〔3〕 魂の不滅性の証明における諸問題

疑問IIIは「学問と魂は分離され得ない仕方である⁽¹²⁰⁾」に対する疑問である。後年この仮定が単純には成立しないことを知るようになる⁽¹²¹⁾。その他にも次々と新たに疑問が提出される。V. 魂が滅びないことが証明されたとしても肉体の死が真理を忘却さすのではあるまいか⁽¹²²⁾とか、或はVI. 魂が不滅であるとしても知性認識し続けるか否かは判らない⁽¹²³⁾などである。これらの疑問が浮んで来る事自体、アウグスティヌスがこの証明に満足していない事を示している。「理性」は不満足気な「アウグスティヌス」を、これらの疑問は知性との関係において考えられなければならないので、次に「知性」を論ずる時に取り挙げようと言って慰める⁽¹²⁴⁾。

確かに鋭く直観されたように「知性」は問題を孕んでいる。なぜなら上のように扱われた魂は知性を含んだものであるが、それは幾何学的な精神つまり知性一般であって個的な魂ではない。その結果、それは感覚を媒介とした不死性の証明と同じ問題を孕むからである。

信仰によって受け取られるべきものは知性によって解され得るという確信の下に探究された魂の不死性の証明は、二段階の前半のみを扱ったままで、不満足に終わってしまった。しかしこの事は単に否定的のみ解されるべきではない。前の真理論におけると同様、アウグスティヌスは回心を経て獲得した新しい自己を古い伝統的な哲学の立場から解釈しようとする努力を経て新たな地平を開いていく過程にあるからである。即ち魂の不死というモチーフは後年哲学的な次元から神学的なそれへと移されて「復活」の問題として再び現われて来る。つまり『独語録』における魂の不死性の証明は『独語録』直後の著作『魂の不死性について』と共に失敗の記録を作ったが、これはそのような新しい立場への自覚的な飛躍の準備であったと考えられる。

V 結 論

『独語録』はアウグスティヌスが回心後初めて著わした信仰の哲学的追究であった。神と魂を求めて出発した探究は、神、真理、魂の三つの領域を試行錯誤をしつつなされて来た。しかしながら三つが三つともその初めの意図を果すことができず、問題提起のままに終わってしまっている。これを見るならいささか竜頭蛇尾の観がする。しかしながらアウグスティヌスの後年の思想及び中世思想全体を見渡す時、『独語録』の持つ意味は重大である。と言うのは本書で提起された神の認識、真理論、魂の不死及び魂の内への探究はいづれもアウグスティヌス一人を越えて中世全体に渡って問題とされるのであるからである。アウグスティヌスはキリスト教の伝統に立ち、これらの問題に哲学的な追及の道を拓いた一人である。以上を考えあわせるなら矛盾、未解決に終わった諸問題に新たな光が投げかけられる。

アウグスティヌス自身はマニ教を経てネオプラトニズムに接した後にキリスト教に回心した。しかしこれを通して新しき人——キリスト教徒——になったとしても、当時のプラトニズムを教養として育ったアウグスティヌスにとって、思惟構造そのものまでも突然キリスト教的に変貌を遂げるわけではない。そこに古き人、プラトニストとしての側面が残っていたのは当然である。この二つがアウグスティヌス一人の中に混在していた。しかしそれは平和裏にではなく、回心によって根底から新しくされた自己を古き人によって解釈しようとするところから生ずる葛藤においてであった。ここから以上見て来た様な諸矛盾や諸問題が生じて来ていると思われる。

では何故この新しい自己を古き自己で解釈しようとしたのであろうか。それは当時の彼にとって、他に手段がなかったからである。つまり彼以前には新しき自己を解釈するべき哲学が十分ではなかったからである。もしプラトニズムでキリスト教徒としての自己を解釈し尽し得たとしたらこのような問題は生じなかった。しかしアウグスティヌスには、そこに解消し切れない何かがあった。そしてあったからこそ矛盾と葛藤の内にあり、そこから出て来たアポリアが新しい哲学の種子となり次代に引き継がれていったのである。

アウグスティヌス個人にとっては中途半端に或は失敗に終わった『独語録』に価値があるとするなら自己及び世界を古い座標系から新しい座標系に変換しようとする苦闘にあるのではないか。

以上の観点に立って、提起された主要問題をまとめてみよう。

1. 真理論においては存在として見られた真のものと、真理の宿りとして見られた真のものとが可滅か不滅かという点で矛盾対立していた。これは新しい座標系から見られたものと古い座標系から見られたものと、ものとしては同一であるにもかかわらず矛盾対立の相の下に現われているのだと思われる。前者は存在を「無から創造する神」によって与えられたものと云う側面から見られている。この真理観はアウグスティヌスによって哲学的に基礎付けられて中世に流れ込んでゆく。他方後者は有分による真であって、ギリシア以来の伝統的な考え方である。このアイデア論はアウグスティヌスにあって斥けられてしまったのではなくて、或る変容を被ってその思想のうちに取り込まれていく。例えば諸学問が真であり、また $1 + 2 = 3$ というような命題が真であるのは、神の思惟の中にそれらのアイデアが存在しているからである。ゆえに神のアイデアに存在していないものは真ではないといった具合である。このようにキリスト教の伝統を哲学化し、哲学的伝統をキリスト教化しながら思想的な発展をとげていく。もとより異質の2つの文化の合流には激しい衝突が生じる。アウグスティヌスは内にその衝突を持った一人であったが、特に『独語録』においては、それが一層激しい仕方であらわれていると思われる。

2. 魂の不死はキリスト教信仰によって確信されている。それを哲学的に理解しようと欲した。しかしやはりここにも二つの立場がもつれ合っているのを見る。最初は、個別的と考えられる感覚

を通して個的靈魂の不死性を証明しようとした。感覚に着眼したことはアウグスティヌスの独自の点であった。だがこの考えに限界を見窮わめて、伝統的なギリシア以来の考え方を採った。これが真理を媒介とする不死性の証明である。これは一見うまく行ったかのように見えた。しかしこれもキリスト教徒としてのアウグスティヌスを満足させるものではなかった。このように試行錯誤を繰返しつつ問題は後年「復活」という次元に移されてゆく。

このように『独語録』のアウグスティヌスにおいては、新しく問題が提起されたままに終わっているが、これらの諸問題はやがてアウグスティヌス自身の内部にとどまらず千年を経たトマス等にも引き継がれてゆくものとなる。だがこのような諸問題も結局は一つの根源的な問、「神と魂を知りたい」から出ていることを忘れてはならない。ここにアウグスティヌスの独自性と深さが明確に見て取られる。

〔追記〕本論文は昭和45年に書かれたものに、若干の修正と補正を加えたものである。

VI 文 献

1. テキスト

総て Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de Saint Augustin, (Paris, Desclée De Brouwer et Cie) の版を使用した。

- 1) *Soliloquia*, 1948
- 2) *Confessiones*, 1962
- 3) *De Magistro*, 1952

2. 訳 本

- 1) 『ソリロキア——私との対話——』高桑純夫訳、筑摩書房、1942
- 2) 『告白』山田晶訳、世界の名著14、中央公論社、1968

3. 参考文献 (具体的に言及しなかったが、参考になったものも含める)

- 1) Etienne Gilson, *The Christian Philosophy of Saint Augustine*, tr. by L. E. M. Lynch New York, Vintage Books, a Division of Random House, 1967
- 2) Frederick C. Copleston, *Medieval Philosophy*, New York and Evanston, Harper Torchbooks, The Cathedral Library, Harper & Row, 1952
- 3) Thomas Aquinas, *De ente et esse* (Marietti)
- 4) 「存在と真理」山田晶、『中世思想研究Ⅷ』中世哲学会編、1966
- 5) 「アウグスティヌスにおける『真』と『真のもの』について——Soliloq. I, c. 15, nn. 27~28——」山田晶、『中世思想研究Ⅻ』中世哲学会編、1970
- 6) 「ものの真理」山田晶、『中世思想研究Ⅶ』中世哲学会編、1965
- 7) 「中世における神と人間」山田晶、岩波講座、『哲学ⅩⅥ——哲学の歴史Ⅰ——』、1969

VII 註

- 1) Confess. IX, c. 4, n. 7, ... libri disputati cum praesentibus et cum ipso me solo *coram te*; ここで言う libri disputandi... cum ipso me は『独語録』を指している。

Soliloq. I, c. 1, nn. 1, R. Ecce, fac te invenisse aliquid; cui commendabis, ut pergas ad alia? A. Memoriae scilicet. R. Tantane illa est ut excogitata omnia bene servet? A. Difficile est, imo non potest. R. Ergo scribendum est. Sed quia agis, quod valetudo tua scribendi laborem recusat? Nec ista dictari debent; nam *solitudinem meram desiderant*. A. Verum dicis. Itaque prorsus nescio quid agam. R. *Ora salutem et auxilium* quo ad concupita pervenias, et hoc ipsum litteris manda, ut prole tua fias animosior. Deinde quod invenis paucis conclusiunculis breviter collige.

高桑訳『ソリロキア』の「序」参照。(イタリック体は筆者による。以下同じ)

- 2) Soliloq. I, c. II, n. 7, A. Ecce oravi Deum. R. Quid ergo scire vis? A. Haec ipsa omnia quae oravi. R. Breviter ea collige. A. *Deum et animam scire cupio*. R. Nihilne plus? A. Nihil omnino.
- 3) この問題意識は後年の『告白』においても明確にあらわれている。
Confess. X, c. I, n. 1, *Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam, sicut et cognitus*

sum.

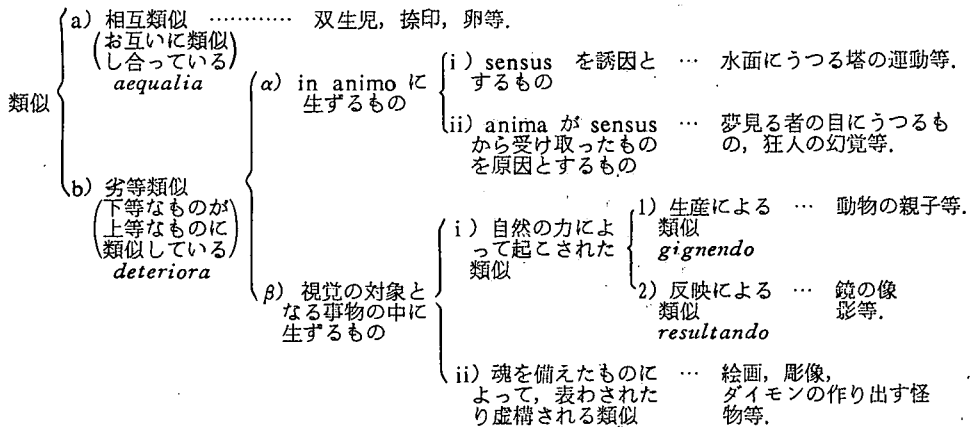
10巻は現在の自己の告白である。その冒頭の祈りが上記である。従って、『告白』執筆当時も、この探究は継続させられていたのである。

- 4) Soliloq. I, c. I, n. 1, ait mihi subito, sive ego ipse, sive alius quis extrinsecus, sive intrinsecus, nescio.
- 5) 例えば、1巻に於いて、神に至る理論的な探究を終え、それに自己を適用し、自分は十分健康になっているので早く神に至る実践的順序を示し、導くようにと、アウグスティヌスは理性に迫る。これに対して、理性は、それを抑えつつ順序を踏んで進めようとしている。
Ibid., I, c. XIV, n. 24, 25.
- 6) Ibid., I, c. XV, n. 27, R. Gerit tibi ille medicus morem. Nam nescio quis me quo te ducam fulgor invitatur et tangit. Itaque accipe intentus.
以上は「光」によって導かれている「理性」である。また明確に光が導いて下れているとは言われていないが、突然、アポリアからぬけ出すために、上から照らされていることが暗示される箇所もある。例えば
Ibid., I, c. IX, n. 16, の「理性」である。
- 7) 対話を始める前に祈りを要求する「理性」
Ibid., I, c. I, n. 1, Ora salutem et auxilium quo ad concupita pervenias, et hoc ipsum litteris manda, ut prole tua fias animosior.
Ibid., II, c. I, n. 1, Itaque ora brevissime ac perfectissime, quantum potes. A. Deus semper idem, noverim me, noverim te. Oratum est.
アポリアに陥った時に、神助を乞い求める祈りを要求する「理性」
Ibid., II, c. VI, n. 9, R. Deus cui nos commisimus, sine dubitatione fert opem, et de his angustiis liberat nos, modo credamus, et eum rogemus devotissime.
A. Nihil plane libentius hoc loco fecerim; nam nusquam tantam caliginem pertuli.
Deus, Pater noster, qui ut oremus hortaris, qui et hoc quod rogaris praestas; siquidem cum te rogamus, melius vivimus, melioresque sumus: exaudi me palpitantem in his tenebris, et mihi dexteram porrigere. Praetende mihi lumen tuum, revoca me ab erroribus; te duce in me redeam et in te. Amen.
- 8) De magistro, c. XI, n. 38, De universis autem quae intelligimus non loquentem qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus veritatem, verbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem qui consulitur, docet, qui in *interiore homine* habitare dictus est *Christus*, id est incommutabilis Dei Virtus atque sempiterna Sapientia:
- 9) Soliloq. II, c. I, n. 1, A. Deus semper idem, noverim me, noverim te. Oratum est.
- 10) Ibid., I, c. I, n. 1, Volventi mihi multa ac varia mecum diu, ac per multos dies sedulo quaerenti memetipsum ac bonum meum, quidve mali evitandum esset;
- 11) Ibid., I, c. X, n. 17, c. XIV, nn. 25, 26, 特に、前者では、情欲がいかにかに嫌悪されるべきかを述べている。しかし、後者において、弱くではあるが、情欲の誘惑にそそられた自己を「理性」の鋭い礼明によってあばき出される。脱したとはいえ隙があれば、しのびよって来る「悪」の影に恐れを感じている。
- 12) Ibid., I, c. I, n. 5, Nihil aliud habeo quam voluntatem; nihil aliud scio nisi fluxa et caduca spernenda esse; certa et aeterna requirenda.
- 13) Ibid., I, c. I, n. 2, Deus universitatis conditor, praesta mihi primum ut bene te rogem, deinde ut me agam dignum quem exaudias, postremo ut liberer.
- 14) Ibid., I, c. I, n. 5, Jam te solum amo, ...
Ibid., I, c. II, n. 7, A. Quia si aliquid Deo simile scirem, sine dubio id amarem; nunc autem nihil aliud amo quam Deum et animam, ...
- 15) 註14)を参照。
- 16) Soliloq. I, c. VIII, n. 15, Ergo quomodo in hoc sole tria quaedam licet animadvertere; quod est, quod fulget, quod illuminat: ita in illo secretissimo Deo quem vis intelligere, tria quaedam sunt; quod est, quod intelligitur, et quod caetera facit intelligi.
- 17) Ibid., Ergo et illa quae in disciplinis traduntur, quae quisquis intelligit, verissima esse nulla dubitatione concedit, credendum est ea non posse intelligi, nisi ab alio quasi suo sole illustrentur.
- 18) scire を「知る」と訳すが、それは「確実に知る」の意味である。
- 19) via negativa: この世で知られるものを否定することを通じて、完全なものを明らかにしていく方法。
- 20) Soliloq. I, c. III, n. 8, R. Ergo vel ita Deum nosse tibi satis est, ut nosti quo cras signo luna cursura sit? A. Non est satis:
- 21) Ibid., A. ... nam hoc sensibus approbo. Ignoro autem utrum vel Deus vel aliqua naturae

- occulta causa subito lunae ordinem cursumque commutet : quod si acciderit, totum illud quod praesumpseram, falsum erit. R. Et credis hoc fieri posse? A. Non credo. Sed *ego quid sciam quaero, non quid credam.*
- 22) Soliloq. I, c. III, n. 8, R. Respuis igitur in hoc causa omne testimonium sensuum? A. Prorsus respuo.
- 23) Ibid., R. Accipio istud : sed tamen si quis tibi diceret, *Faciam te sic Deum nosse, puomodo nosti Alypium* ; nonne gratias ageres, et diceres, Satis est? A. Agerem quidem gratias, *sed satis esse non dicerem.*
- 24) Ibid., R. Quid? illud familiarem tuum quem te adhuc ignorare dixisti, sensu vis nosse, an intellectu? A. Sensu quidem quod in eo novi, si tamen sensu aliquid noscitur, et vile est, et satis est : illam vero partem qua mihi amicus est, id est ipsum animum, *intellectu assequi cupio.* R. *Potestne aliter nosci?* A. *Nullo modo.* R. Amicum igitur tuum et vehementer familiarem, audes tibi dicere esse ignotum? A. Quidni audeam?
- 25) Ibid., I, c. II, n. 7, A. Et homines sunt, et eos amo, non eo quod animalia, *sed eo quod nomines sunt ; id est, ex eo quod rationales animas haent*, quas amo etiam in latronibus.
- 26) Ibid., I, c. III, n. 8, A. Itaque cum *memetipsum ignorem*, gua potest a me affici contumelia, quem mihi esse dixero ignotum,
- 27) Ibid., I, c. VI, n. 13, R. ... et haec est vere perfecta virtus, ratio perveniens ad finem suum, quam beata vita consequitur.
- 28) Ibid., I, c. XIV, nn. 24~26が, この様子を期せずして, 物語っている。
- 29) Ibid., I, c. IV, n. 9, R. ... Nunc illud responde : si ea quae de Deo dixerunt Plato et Plotinus vera sunt, satisne tibi est ita Deum scire, ut illi sciebant? A. Non continuo,
- 30) Ibid., I, c. IV, n. 9, A. ... Nam multi copiose dicunt quae nesciunt, ut ego ipse omnia quae oravi, me dixi scire cupere, quod non cuperem si jam scirem : num igitur eo minus illa dicere potui? Dixi enim *non quae intellectu comprehendendi*, sed quae undecumque collecta memoriae mandavi, et *quibus accommodavi* quantam potui *fidem* : *scire autem aliud est.*
- 31) Ibid., I, c. V, n. 11, A. ... Deinde, si Dei et istarum rerum [linearum et pilarum] scientia par esset, tantum gauderem quod ista novi, quantum me Deo cognito gavisurum esse praesumo. [] 内は筆者の補足。以下同様。
Ibid., I, c. VII, n. 14. R. Ergo cum animae Deum videre, hoc est Deum intelligere contingerit, ... Caritati vero non solum nihil detrahetur, sed addetur etiam plurimum。
アウグスティヌスがこのように断言できるのは, 何らかの程度, このような愛と, 喜びを持った体験があることを暗示している。(v. Confess. VII, c. X, n. 16; IX, c. X, nn. 24, 25)
- 32) 「我と汝」の関係における神の追究は「告白」にも明瞭に自覚されている。例えば,
Confess. I, c. V, n. 5, quid mihi es? miserere, ut loquar. quid tibi sum ipse, ...
... quid sis mihi.
- 33) Ibid., X, c. I, n. 1, Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam, sicut et cognitus sum.
- 34) Soliloq. I, c. VI, n. 12, R. ... Promittit enim ratio quae tecum loquitur, ita se demonstraturam Deum tuae menti, ut oculis sol demonstratur. Nam mentis quasi sui sunt oculi sensus animae ; ...
つまり, $\begin{cases} \text{sensus} \longleftrightarrow \text{anima} \\ \text{oculus} \longleftrightarrow \text{mens} \end{cases}$ の対応関係にある。
- 35) Ibid., R. ... Ego autem ratio ita sum in mentibus, ut in oculis est aspectus.
Ibid., I, c. VI, n. 13. R. Aspectus animae, ratio est :
つまり aspectus \longleftrightarrow ratio の対応関係
- 36) Ibid., I, c. VI, n. 12, R. Sine tribus istis igitur anima nulla sanatur, ut possit Deum suum *videre*, id est *intelligere*.
Ibid., R. ... Ipsa autem *visio, intellectus* est ille qui in anima est, qui conficitur ex intelligente et eo quod intelligitur : ut in oculis videre quod dicitur, ex ipso sensu constat atque sensibili, quorum detracto quolibet, videri nihil potest. ここで言う intellectus は「知性認識作用」を意味している。
つまり *videre (visio) \longleftrightarrow intelligere (intellectus)* の対応関係
- 37) Ibid., I, c. VI, n. 12, R. ... Oculi sani mens est ab omni labe corporis pura id est, a cupiditatibus rerum mortalium jam remota atque purgata :
- 38) Soliloq. I, c. VI, n. 12,

- 39) Ibid., I, c. VI, n. 13, R. … Sed et ipse aspectus quamvis jam sanos oculos convertere in lucem non potest, nisi tria illa permaneant : fides, qua credat ita se rem habere, ad quam convertendus aspectus est, ut visa faciat beatum ; spes, qua cum bene aspexerit, se visurum esse praesumat ; caritas, qua videre perfuique desideret.
- 40) Ibid., R … aspectus rectus atque perfectus, id est quem visio sequitur, *virtus* vocatur ; est enim virtus vel recta vel perfecta ratio.
- 41) Ibid., R. … Jam aspectum sequitur ipsa visio Dei, qui est finis aspectus ; non quod jam non sit, sed quod nihil amplius habeat quo se intendat :
- 42) Ibid., R … et haec est vere perfecta virtus, ratio perveniens ad finem suum, quam beata vita consequitur.
- Ibid., I, c. VII, n. 14, R Ergo cum animae Deum videre, hoc est Deum intelligere contigerit, … Caritati vero non solum nihil detrahetur, sed addetur etiam plurimum.
- 43) Ibid. I, c. VII, n. 14, の全体. 結論のみを示すと. … tertio vero in hac vita, omnia [i. e. fides, spes, caritas] ; post hanc vitam, sola caritas. [] 内の語は筆者が補った.
- 44) Ibid., I, c. X, nn. 17~19,
- 45) Ibid., I, c. IX, n. 16 ; c. XII, nn. 20~21,
- 46) Ibid., I, c. XIII, n. 22, A. … Ego autem solam propter se amo sapientiam,
- 47) Ibid., I, c. XIII, n. 23, R … Quippe pro sua quisque sanitate ac firmitate comprehendit illud singulare ac verissimum bonum. Lux est quaedam ineffabilis et incomprehensibilis mentium.
- 48) Ibid., I, c. XI, n. 19, A … nunc ea omnia [i. e. istorum cupiditas] prorsus asperror : Ibid., I, c. XIII, n. 22, A … Jam certe ostendi nihil aliud me amare, siquidem quod non propter se amatur, non amatur. Ego autem solam propter se amo sapientiam, caetera vero vel adesse mihi volo, vel deesse timeo propter ipsam ; vitam, quietem, amicos. [] 内は筆者の補足.
- 49) Ibid., I, c. XIV, nn. 25, 26,
- 50) Ibid., I, c. XIII, n. 23, の全体. 特に, … Nam sunt *nonnulli oculi* tam sani et vegeti, qui se, mox ut aperti fuerint, in ipsum solem sine ulla trepidatione convertant. His quodammodo ipsa lux sanitas est, nec doctore indigent, sed sola fortasse admonitione. His credere, sperare, amare satis est. *Alii* vero [*oculi*] ipso quem videre vehementer desiderant, fulgore feriuntur, et eo non viso saepe in tenebras cum delectatione redeunt. … [] は筆者が補った単語である.
- 51) Ibid., I, c. XV, n. 27, R. Quid ? veritatem non vis comprehendere ? A. Quasi vero possim *haec* nisi per illam cognoscere. R. Ergo prius ipsa cognoscenda est, per quam possunt *illa* cognosci.
- haec, illa は「神と魂」を指す.
- 52) Ibid., I, c. XV, n. 28, R. … Si enim falsa arbor est, non est arbor ; si autem arbor est, vera sit necesse est.
- 53) Ibid., I, c. XV, n. 28, R. … : non enim hoc sensu, sed intelligentia judicatur.
- 54) Ibid., I, c. XV, n. 27, A. … Non enim casto castitas, sed castitate fit castum ; ita etiam, si quid verum est, veritate utique verum est.
- 55) Ibid., I, c. XV, n. 28, R. Concluditur ergo aliquid quod verum sit, interire. A. Non contravenio.
- 56) Ibid., I, c. XV, n. 29, R. … Nihil autem verum in quo veritas non est. Conficitur itaque non esse vera, nisi quae sunt immortalia.
- 57) Ibid., II, c. II, n. 2,
- 58) Ibid., II, c. II, n. 2, R. Nullo modo igitur occidet veritas. A. Perge ut coepisti, nam ista collectione nihil est verius.
- 59) なぜなら, 本章の註56) に見られる如く, 真のものの中には真理が宿っており真理は不滅であるからである.
- 60) 本論文Ⅱ, § 2. の末.
- 61) 註52), 54)
- 62) 偽は *falsum*, と *falsitas* の訳語である. この二者の区別は少なくとも『独語録』では本質的ではない. 従って, 同一視した.
- 63) Soliloq. II, c. V, n. 8, A. Ergo illud dico et sic definio, nec vereor ne definitio mea ob hoc improbetur, quod nimis brevis est : nam verum mihi videtur esse id quod est. R. Nihil ergo erit *falsum*, quia quidquid est, verum est.

- 64) Soliloq. II, c. V, n. 8, A. Verum est quod ita se habet ut cognitori videtur, si velit possitque cognoscere. R. Non erit igitur verum quod nemo potest cognoscere? Deinde, si falsum est quod aliter quam est, videtur; quid, si alteri videatur hic lapis, lapis; alteri lignum? eadem res et falsa et vera erit?
- Ibid., II, c. V, n. 7,
- 65) Ibid., II, c. V, n. 8, A. In magnas angustias me conjecisti, nec invenio prorsus quid respondeam, Ita fit ut cum aliter doceri nolim quam istis interrogationibus, verear jam tamen interrogari.
- 66) Ibid., R. Prius quid sit falsum, etiam atque etiam ventilemus. A. Miror si quidquam aliud erit, quam quod non ita est ut videtur.
- 67) Ibid., R. Similitudo igitur rerum quae ad oculos pertinet, mater est falsitatis.
- 68) similitudo に対する考察は, Soliloq. II, c. VI, n. 11; に詳しくある. これを表にまとめる. ここでは視覚における similitudo を考察する.



このような類似の構造は, 聴覚, 味覚, 触覚, 嗅覚のあらゆる感覚についても成立する.

- 69) Soliloq. II, c. VII, n. 13, の全体. 結論のみを引用すると, R. Ergo si eo veri essent, quo veri simillimi apparent, nihilque inter eos et veros omnino distaret, eoque falsi quo per illas val alias differentias dissimiles convincerentur; nonne similitudinem veritatis matrem, et dissimilitudinem falsitatis esse fatendum est?
- 70) Ibid., II, c. VIII, n. 15, A. Video quidem ista; sed cum considero illud quod falsum vocamus, et simile aliquid habere veri et dissimile, ex qua potius parte meruerit falsi nomen, non valeo discernere. Si enim ex eo quod dissimile est, dixero; nihil erit quod non falsum dici possit: nihil enim est quod non alicui rei dissimile sit, quam veram esse concedimus. Item, si dixero eo quod simile est, falsum appellandum; non solum ova illa reclamabunt quae vera eo ipso sunt quo simillima, sed etiam sic non effugiam eum qui me coegerit falsa esse omnia confiteri, quod omnia sibi ex aliqua parte similia esse negare non possum. — Sed fac me non metuere illud respondere, similitudinem ac dissimilitudinem simul efficere ut aliquid falsum recte nominetur; quam mihi evadendi viam dabis? Instabitur enim nihilominus ut omnia falsa esse renuntiem; quippe omnia sibi, ut supra dictum est, et similia quadam ex parte, et dissimilia reperiuntur. — ……
- 71) Ibid., A. … — Restaret ut nihil aliud falsum esse dicerem, nisi quod aliter se haberet atque videretur, ni vereretur illa tot monstra quae me dudum enavigasse arbitrabar. Nam eo rursum repellit vertigine inopinata, ut verum id esse dicam quod ita se habet ut videtur. Ex quo confit sine cognitore nihil verum esse posse: ubi mihi naufragium in scopulis occultissimis formidandum est, qui veri sunt, etiamsi nesciantur. — Aut, si verum esse id quod est dixero, falsum non esse uspiam concludetur, quovis repugnante. Itaque redeunt illi aestus, nec quidquam tanta patientia morarum tuarum processisse me video.
- 72) Ibid., II, c. IX, n. 16, R. … Video enim, tentatis quantum potuimus omnibus rebus, non remansisse quod falsum iure dicatur, nisi quod aut se fingit esse quod non est, aut omnino esse tendit et non est.

73) ここで falsum を分類する。Soliloq. II, c. IX, nn. 16, 17.

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|--------------------------------|---|-----------|-----------------------------------------|---|-------------------------------------------------------------|
| 偽 | { | i) | se fingit esse
quod non est | { | a) fallax | (いつわろうと
欺
いう傾向を少
しでも持って
いる) | { | α) 理性的原因 … 詐欺師, 人間等. |
| | | | | | b) mendax | | | (いつわろうと云
う傾向を持たず
人を楽しませる
のが目的) |
| | | ii) | omnino esse tendit et non est. | | | | | … 2) 詩人や冗談 … 茶番劇, 詩歌,
を言う人が 道化芝居, 冗談等.
原因 |
| | | | | | | | | … 鏡像, 絵画, 型像, 水面にうつる塔の運動, 水面下の
楯の屈曲, 物の影, 夢見る人や狂人を欺く幻覚等. |

- 74) nihil, inane については Soliloq. II, c. VII, n. 31, にある。その中心部だけを引用する。
R. Non est ergo inane verum, quia neque ab eo quod inane non est, inane fieri potest :
et quod veritate caret, verum non esse manifestum est ; et omnino ipsum quod inane
dicitur ex eo quod nihil verum dicitur. Quomodo igitur potest verum esse quod non est ? aut
quomodo potest esse quod penitus nihil est ?
- 75) 岩波講座『哲学XVI, 哲学の歴史I』VII章中世に於ける神と人間, p. 377.
すべてのものはそれぞれの仕方では神から存在を受けている。その存在は神の存在そのものではないが、
神の存在によって、生ぜしめられている存在として、神の存在へのある類似性を有している。そしてその
類似性の度合に応じて、神により近いものとより遠いものととの区別が生じ、かくて世界全体は存在の度合
によってヒエラルキアをなしている。しかし神はこのヒエラルキアの頂点に位するのではなくて、このヒ
エラルキア全体を存在せしめている存在原因として、世界を超越しながらこれを保っている。この関係は
神と世界との間に成り立つ存在のアナロギアと言われる。また『ソリロキア』高桑訳, 序 (p. 5) 参照。
- 76) Soliloq. I, c. 1, n. 3, Te invoco, Decus veritas, in quo et a quo et per quem vera sunt,
quae vera sunt omnia.
- 77) 「存在と真理」山田晶著, 中世思想研究VII.
- 78) Soliloq. II, c. XV, n. 29, A. … Angues ingentes alites junctos jungo.
「我軀につばさ遅しき飛龍をつけぬ」は高桑訳による。(高桑訳『ソリロキア』p. 295)
- 79) Ibid., R. Quia similiter enuntiaretur, etiamsi vere illud Medea fecisset. Imitatur ergo
ipsa enuntiatione veras sententias falsa sententia. Quae si non creditur, eo solo imitatur
veras quod ita dicitur, estque tantum falsa, non etiam fallens. Si autem fidem impetrat,
imitatur etiam creditas veras.
- 80) Ibid., A. … Stannum autem vel plumbum non absurde, ut opinor, falsum argentum
vocamus, quod id res ipsa velut imitatur: neque ex eo falsa est nostra sententia, sed illud
ipsum de quo enuntiat.
- 81) falsum を similitudo の立場から分析をすると次のようになる。

- | | | | | | |
|--------------------------------|---|-----|------------------------------------------------------------------|---|--------------------------------------|
| falsum
(verum を真似
ているもの) | { | i) | falsa sententia
(vera sententia
を真似ている.) | { | α) 表現形式を真似て falsum となる場合。
(欺かない) |
| | | | | | β) 内容そのものまで真似て falsum となる場合。
(欺く) |
| | | ii) | objectum が falsum となる。… 偽の銀=鉛等。
(objectum が verum
を真似ている.) | | |

- 82) Soliloq. II, c. XI, n. 19, A. … Est autem grammatica vocis articulatae custos et
moderatrix disciplina: cujus professionis necessitate cogitur humanae linguae omnia etiam
figmenta colligere, quae memoriae litterisque mandata sunt, non ea falsa faciens, sed de
his veram quamdam docens asserensque rationem.
- 83) Ibid, II, c. XI, nn. 20, 21. R. Nonne tibi videtur, si nihil in ea definitum esset, et
nihil in genera et partes distributum atque distinctum, eam nullo modo disciplinam esse
potuisse ? A. Jam intelligo quid dicas ; nec ulla mihi occurrit cujusvis facies disciplinae,
in qua non definitiones ac divisiones et ratiocinationes, dum quid quidque sit declaratur,
dum sine confusione partium sua cuique redduntur, dum nihil praetermittitur proprium,
nihil annumeratur alienum, totum hoc ipsum quo disciplina dicitur egerint. R. Ergo et
totum ipsum quo vera dicitur. A. Video consequi. R. Responde nunc quae disciplina
contineat definitionum, divisionum, partitionumque rationes. A. Jam superius dictum est
haec disputandi regulis contineri.

- Soliloq. II, c. XI, n. 21, R. ... Quod non de una grammatica mihi licet concludere, sed prorsus de omnibus disciplinis. Nam dixisti, vereque dixisti, nullam disciplinam tibi occurrere, in qua non definiendi jus atque distribuendi idipsum, ut disciplina sit, fecerit.
- 84) Ibid., R. At, si eo verae sunt [disciplinae] quo sunt disciplinae, negabitne quispiam, veritatem ipsam esse per quam omnes verae sunt disciplinae? [] 内は筆者の補いである。
- Ibid., A. ... Quae illam potius existimo esse veritatem, qua et ista ipsa ratio [i. e. ratio disputandi ipsa] vera est. [] 内は筆者の補足。
- 85) Ibid., R. At, si ad eam pertinet hoc officium, per seipsam disciplina vera est. Quisquamne igitur mirum putabit, si ea qua vera sunt omnia, per se ipsa et in seipsa vera sit veritas?
- 86) 本論文, II, § 2.
- 87) Soliloq. II, c. I, n. 1, R. Non igitur vivere propter ipsum vivere amas, sed propter scire.
- 88) Ibid., R. ... beatus autem nemo nisi vivens, et nemo vivit qui non est :
- 89) そして, vivere も esse も, intelligere のためである。
Ibid., R. ... esse vis, vivere et intelligere ; sed esse ut vivas, vivere ut intelligas. Ergo esse te scis, vivere te scis, intelligere te scis.
- 90) Ibid., R. ... Sed utrum ista semper futura sint, an nihil horum futurum sit, an maneat aliquid semper, et aliquid intercidat, an minui et augeri haec possint, cum omnia mansura sint, nosse vis. A. Ita est.
- 91) Ibid., R. Si igitur probaverimus semper nos esse victuros, sequetur etiam semper futuros [esse]. A. Sequetur. R. Restabit quaerere de intelligendo. [] 内は筆者の補足。
- 92) 本論文II, § 3, [1]
- 93) Soliloq. II, c. III, n. 3. R. Nunc respondeas mihi velim, utrum tibi sentire anima videatur, an corpus? A. Anima videtur.
- 94) 註25) 参照。
- 95) Soliloq. II, c. XVIII, n. 32.
- 96) 「不死性」は "immortalitas" の訳である。【独語録】では「不滅」と「不死」の区別がなされていない。本論文III, § 3. では「不滅性」と訳した。
- 97) 註66), 72) 参照。
- 98) Soliloq. II, c. III, n. 3, R. Confitendum est igitur non eum falli qui falsa videt, sed eum qui assentitur falsis. A. Plane confitendum.
- 99) Ibid., R. Quid ipsum falsum? quare falsum est? A. Quod aliter sese habet quam videtur. R. Si ergo non sint quibus videatur, nihil est falsum. A. Sequitur. R. Non igitur est in rebus falsitas, sed in sensu: non autem fallitur qui falsis non assentitur. falsum は non esse であることが考察された(本論文III, § 4)。しかし, この場合, non esse と言うのは, 実在の世界において non esse と言う意味であった。一方 falsum は全くの「無」即ち, nihil 或いは, inane ではない。何らかの意味で, esse を持つものである。つまり, falsum は, in sensu に存在を持つ。この点で, falsum は, nihil, inane と区別される。
ではどうして, 偽が生ずるのであろうか, 偽の生ずる原因として, 次を挙げている。
Ibid., II, c. III, n. 3, R. At nullus sensus sine anima, nulla falsitas sine sensu. Aut operatur igitur anima, aut cooperatur falsitati.
- 100) 魂の本質には, vivere と esse とが同時に在って, 切り離すことはできない。しかし, vivere, esse は, 同義ではない。従って, 概念上切り離しうる。もし魂は esse しているのみで, その働きがないなら vivere しているとは言えず, 従って魂ではあり得ない。また vivere しているなら必ず esse する。
Soliloq. II, c. III, n. 4, R. Falsitatem dixisti sine sensu esse non posse, et eam non esse non posse: semper igitur est sensus. At nullus sensus sine anima: anima igitur sempiterna est. Nec valet sentire, nisi vivat. Semper igitur anima vivit.
- 101) Ibid., II, c. III, n. 3, R. Si ergo non sint quibus videatur, nihil est falsum.
- 102) 註91)
- 103) Soliloq. II, c. IV, n. 5, A. Confectum hactenus, ut possint vicissim aliae nasci, aliae mori.
- 104) 【ソリロキア】、高桑訳、註185*, (p. 344).
- 105) rerum natura を使った魂の不死証明を展開してみる。(実際は展開されていない。)
1) rerum natura は anima なしには存在し得ない。
2) rerum natura は常に存在する。

- 3) 従って anima は常に存在する。
 4) anima は生きていなければ, rerum natura を見ることはできない。
 5) ゆえに anima は永遠に生きる。
 v. Soliloq II, c. IV, n. 5
- 106) 註103) 参照。
 Soliloq. II, c. IV, n. 5, A. ... Nihilominus enim manet illud quod plurimum me movet, nasci animas et interire, atque ut non desint mundo, non earum immortalitate, sed successione provenire.
- 107) Ibid. II, c. IV, n. 6, R. Ergo si nihil verum est, nisi ita sit ut videtur ; nec quidquam corporeum videri nisi sensibus potest ; nec sentire, nisi anima ; nec, si verum corpus non sit, corpus esse : restat ut corpus esse non possit, nisi anima fuerit.
- 108) 註106) 参照。
 109) つまり, 循環論に陥っていること。
 110) 註106) 参照。
 111) Soliloq. II, c. XIII, n. 22, 全体であるが, 中心点を挙げると, R. Esse aliquid in aliquo, non nos fugit duobus modis dici. Uno quo ita est, ut etiam sejungi atque alibi esse possit, ut hoc lignum in hoc loco, ut sol in oriente : altero autem quo ita est aliquid in subjecto, ut ab eo nequeat separari, ut in hoc ligno forma et species quam videmus, ut in sole lux, ut in igne calor, ut in animo disciplina, et si qua sunt alia similia. An tibi aliter videtur ?
- 112) Soliloq. II, c. XIII, n. 24, R. Omne quod in subjecto est, si semper manet, ipsum etiam subjectum maneat semper necesse est. Et omnis in subjecto est animo disciplina. Necesse est igitur semper ut animus maneat, si semper manet disciplina. Est autem disciplina veritas, et semper, ut in initio libri hujus ratio persuasit, veritas manet. Semper igitur animus manet, nec animus mortuus dicitur.
- 113) Ibid., II, c. XIV, n. 25,
 114) Ibid., II, c. XIV, n. 26,
 115) Ibid., II, c. XV, n. 28, R. Ex eo, quantum memini, veritatem non posse interire conclusimus, quod non solum si totus mundus intereat, sed etiam si ipsa veritas, verum erit et mundum et veritatem interisse. Nihil autem verum sine veritate : nullo modo igitur interit veritas.
- 116) Ibid., II, c. XIX, n. 33, R. ... Sive enim figurae geometricae in veritate, sive in eis veritas sit, ...
- 117) Ibid., R. Quid ergo jam opus est ut de disciplina disputationis requiramus ? Sive enim figurae geometricae in veritate, sive in eis veritas sit, anima nostra, id est intelligentia nostra, contineri nemo ambigit, ac per hoc in nostro animo etiam veritas esse cogitur. Quod si quaelibet disciplina ita est in animo, ut in subjecto inseparabiliter, nec interire veritas potest ; quid, quaeso, de animi perpetua vita, nescio qua mortis familiaritate dubitamus ? An illa linea vel quadratura vel rotunditas habent alia quae imitentur ut vera sint ? A. Nullo modo id possum credere, nisi forte aliud sit linea quam longitudo sine latitudine, et aliud circulus quam linea circumducta undique ad medium aequaliter vergens. R. Quid ergo cunctamur ? An ubi ista sunt, veritas non est ? A. Avertat Deus amentiam. R. An disciplina non est in animo ? A. Quis hoc dixerit ? R. Sed forte potest, intereunte subjecto, id quod in subjecto est permanere ? A. Quando mihi hoc persuadetur ? R. Restat ut occidat veritas. A. Unde fieri potest ? R. Immortalis est igitur anima : ...
- 118) 註113),
 Ibid., II, c. XIX, n. 33, A. ... Sed, quaeso, illa quae restant expeditas, quomodo in animo imperito, non enim eum mortalem dicere possumus, disciplina et veritas esse intelligantur.
- 119) Ibid., II, c. XX, nn. 34, 35, 以下にその内容を要約する。「」内
 「忘却 (oblivio) に三種類ある, 第一は, 最も強い忘却である。例えば母に『お前は生まれて間もなくにっこり笑ったよ』と言われた場合, 本人は, そのことを全然思い出すことはできないが, そのことを真実 (verum) として, 信じざるを得ない。この種の忘却によって埋められている真のものは, 信頼 (credere) の対象である。第二に, 忘れた当のものを思い出すことはできないにもかかわらず, 出会うもの全てを, 当のものかどうかを判別することができる。これは想起が判断力となっているからである。この種の忘却によって埋れている真のものは, 想起が判断者となって 掘り出される。第三に, 想起と, 想起されるべき真理に一番近い忘却である。これは想起する当のものを忘れはしていない。ただ, いつ, どこで, どんな具合にして, 知ったかを思い出せないものである。このような場合, その一部でも思い出せば, 一切の情況が, 光が差し込まれて, 突然明かるくなったように, 記憶の中に, 甦え

る。学ぶことは、この忘却の中にある真理を掘り起こして来ることである。忘却の中にある真理は一つであり、それは、思惟の想像力 (*imaginatio cogitationis*) によってではなくて、理性 (*ratio*)、知性 (*intellectus*) によって、掘りおこされる。」

従って、いかに、無知の魂であっても、その内にも、発掘されるべき真理が存在し、宿っている。このようにして、疑問 (II) に、答えが与えられている。

120) 本論文, IV, § 4, [2]; 註111) 参照。

121) *Confess.* VII, c. XVII, n. 23. …, *inueneram inconmutabilem et ueram ueritatis aeternitatem supra mentem meam conmutabilem.*

122) *Soliloq.* II, c. XX, n. 36, R. … *Non enim credo te parum formidare ne mors humana, etiamsi non interficiat animam, rerum tamen omnium, et ipsius, si qua comperta fuerit, veritatis oblivionem inferat.*

123) *Ibid.*, A. … *Qualis enim erit illa aeterna vita, vel quae mors non ei praeponenda est, si sic vivit anima, ut videmus eam vivere in puero mox nato?*

124) *Ibid.*, R. *Haec dicentur operosius atque subtilius, cum de intelligendo disserere coeperimus.*

(昭和53年11月4日受理)

(昭和55年1月8日発行)